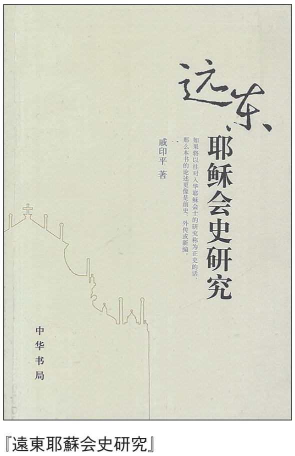
書評

中国におけるイエズス会研究の最新成果
——戚印平氏の三著作を中心に

郭　南燕



『遠東耶蘇会史研究』
中華書局、2007年

　著者戚印平（中国・浙江大学教授）は、東アジアにおけるイエズス会宣教史の研究に真摯に取り組んでいる中国人研究者である。これから取りあげる三作が刊行される前に、すでに『日本早期耶蘇会史研究（日本早期イエズス会史研究）』（商務印書館、二〇〇三年）と『東亜近世耶蘇会史論集（東アジア近世イエズス会史論集）』（台湾大学出版中心、二〇〇四年）を上梓している。イエズス会研究を精力的におこない、多くの成果を世に問うてきた氏の姿勢は刮目（かつもく）に値する。

　日本国内でこの五冊を揃えているのは国際日本文化研究センターの図書館のみである。戚氏の研究は中国語で出版されているため、日本国内ではあまり注目されていないようである。その研究内容は、日本人研究者の成果に負うところが極めて大きいが、中国語文献をもほぼ網羅している。

　戚氏は、中国語圏における従来の研究と違う角度から東アジアにおけるイエズス会の活動を取り上げている。それは、イエズス会の献身的な宣教、教育、慈善などの光の部分よりも、その裏にあるような世俗性、政治性、商業性を大きくクローズアップしている。そのためか、氏の文章は冷やかな視線と揶揄の表現によって貫かれている。

『遠東耶蘇会史研究（極東イエズス会史研究）』（中華書局、二〇〇七年）

　『遠東耶蘇会史研究』は十二章からなる。各章は既刊の学術誌論文を大幅加筆したものである。第一章は、イエス・キリストの

弟子聖トマスの中国到来に関する東西の伝承と研究を分析し、その伝承の原因は、神の光が使徒時代にすでに中国大陸に届いていてほしいと願う心理から来たものだと見ている。第二章は、イエズス会創設者の一人であるフランシスコ・ザビエルが日本渡来以前に、すでに中国にも注目していたことを紹介し、ザビエルの日本宣教は、中国宣教の布石だったと推論する。第三章は「Deus」の訳語に関する考察であり、数多くの先行研究を参考にし、特に小島幸枝「漢訳ドチリナの音訳語について」(『キリシタン研究』第二八輯)と土井忠生『吉利支丹論攷』(一九八二年)を多く参考にしている。「天主」という言葉を一番早く使用したのは日本イエズス会だったことを紹介し、その概念の漢訳をめぐり十七世紀に巻き起こった「典礼論争」に触れ、現地語(日本語・中国語)を選択する困難は、いかに現地文化と対話するかを意味し、ラテン語かポルトガル語の原語への固執は、現地語・現地文化との対話を避けることであり、推敲、選択、論争を通して初めて相互理解が可能になる、という氏の観点はうなずける。ただ、ザビエルが「大日」をもって「Deus」を訳したことは単純な不注意や誤りではないという岸野久の新説(『西欧人の日本発見』一九八九年)を見落としたためか、「大日」の誤謬説を踏襲しているのが瑕疵(かし)である。

本章以降の付録は中国語圏の読者に非常に役に立つだろう。著名な原典(和訳)を中国語に部分訳か全訳している。付録1は、ザビエルがコーチンからヨーロッパのイエズス会士に宛てた書簡(一五五二年一月二十九日付)で、日本人の性格や宣教の成果を描き、中国情報をも含む。付録2は、ザビエルが逝去前に書いた手紙(同年十月二十二日付)であり、中国上陸を待ち焦がれながら上川島で中国の商人を相手に宣教したことが述べられ、彼らの誠実さを褒める。付録3は、修道士フェルナンデスの報告書(一五五一年十月二十日付)で、日本人の様々な質問と宣教師の回答を記録し、当時の日本人がいかにキリスト教の概念を理解しようとしたのかを忠実に記録している。

第四章は、イエズス会士の漢字学習と漢字研究の歴史に関する。ジョアン・ロドリゲスの『日本教会史』の漢字に関する記述を長く引用し、宣教師の「全面的、系統的な」漢字認識の成果を認める。第五章は、中国茶と日本の茶道に関する宣教師の記述について、ルイス・アルメイダやルイス・フロイスの紹介を「猟奇的」とするいっぽう、ロドリゲスの記述を「茶道の歴史と文化をよく理解したもの」と見る。

第六章は、十六世紀のポルトガルとスペインの政府がもっていた中国武力征服の計画に対する宣教師の反応(賛否両論)を論じる。複雑なポルトガルとスペイン両国の関係、イエズス会と他の修道会との意見の相違に触れながら、宣教師が採用していた現地

文化への適応策は、中国征服が不可能だったためにやむを得ずにとった方策だと結論づける。イエズス会の陰りを中心に研究したため、このような説得力の弱い結論になったのだろう。

第七章は、日本イエズス会の商業活動に関するものであり、宣教と生存のために生糸、胡椒などの貿易に携わることは理解できても、純粋な信仰伝播者ではないと決める。付録4は、中国と日本間の貿易に関しておこなったイエズス会員の報告（一六二〇年二月十日付）である。第八章は、イエズス会のマカオ管区代表と日本貿易との関係と、商業参与者の利害関係を紹介する。付録5「マカオ駐在日本管区代表規則」（一六一七年）は、イエズス会が貿易の直接参与を戒めており、必需品の購入に関する厳しい規則があったことを示し、商業に明け暮れていたわけではないことが明確に示されている。第九章は巡察使ヴァリニャーノがマカオ政府と締結した生糸貿易契約を詳しく叙述する。この三章で氏が多く依拠したのは、高瀬弘一郎訳注『イエズス会と日本』（一九九三年）、高瀬著『キリシタン時代対外関係の研究』（一九九四年）、『キリシタン時代の研究』（一九七七年）、『イエズス会と日本』（一九八一、一九八八年）、「日本イエズス会の生糸貿易について」（『キリシタン研究』第一三輯）であり、高瀬氏の観点を応用している。

第十章は、「極東イエズス会の通信制度」を詳細に紹介する。イエズス会が公開を許している書簡は信用度が低く、公開されては困るものをよく読めば、都合の悪い事実が見えてくるという見地に立つ。この観点はバイアスがかかっていないか、公平な研究方法なのかを実証する手続きが必要だろう。主な引用文献は松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』（一九六七年）と柳田利夫「イエズス会年報制度と日本〈上〉」（『鎖国日本と国際交流』上巻、一九八八年）である。

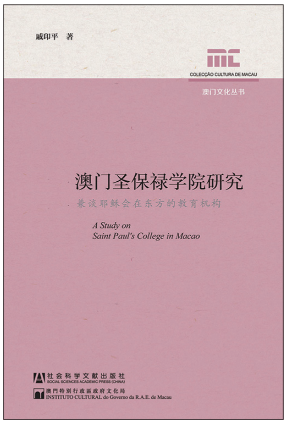
第十一章は、十六、十七世紀、極東の主教任命をめぐって繰り広げられたポルトガル・スペイン両国の利益争奪戦における教会の役割を論じる。マカオ駐在中国主教と日本主教の任命のプロセスを述べ、主教任命は宗教問題ではなく、政治問題と現世利益によると言い切っている。ジョアン・ロドリゲス『日本教会史』とチースリック神父「キリシタン時代における司教問題」（『キリシタン研究』第九輯）を多く引用している。付録6の「イエズス会の各階層の職務」は参考価値が高い。

第十二章は、江戸時代の禁書制度と漢訳キリスト教書籍の日本伝播に関するもので、禁じられた書籍、禁令から漏れた書籍を紹介し、漢文による西洋思想と科学技術の伝播はオランダ語による伝播よりはるかに大きな影響を及ぼしているという指摘は正しい。付録8は、江戸前期の反キリスト教の禅僧雪窓宗崔『対治邪執論』を掲載する。

氏が依拠する文献の大半は欧文史料の和訳と日本人研究者の論

著（河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』、『榎一雄著作集』、『日本関係海外史料・イエズス会日本書翰集』、『大航海時代叢書』、フロイス『日本史』、松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』など）である。本書によって、中国語圏の読者は日本における研究成果に幅広く接することができる。ほかに欧文文献の中国訳も多く利用しているので、本書はイエズス会極東宣教に関する基礎文献と多くの先行研究を備えているといえよう。

『澳門聖保禄学院研究：兼談耶蘇会在東方的教育機構（マカオ・聖パウロ神学校研究）』（社会科学文献出版社、二〇一三年）

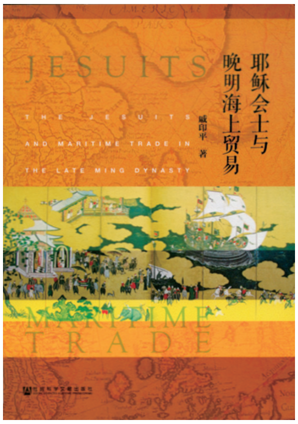


『澳門聖保禄学院研究』
社会科学文献出版社、2013年

『澳門聖保禄学院研究』は、前書から六年後に刊行されたものである。聖パウロ神学校教会の焼け跡は世界遺産に指定されて、マカオの観光名所となっている。本書は、マカオのほとんどの書店で販売されていることを、評者が二〇一五年秋にマカオを調査したときに確認したことがある。

本書は五章からなる。第一章はヨーロッパ諸大学とイエズス会の教育理念と実践を述べ、日本の府内コレジオの経験が聖パウロ神学校のモデルとなったとする。第二章は聖パウロ神学校の設立をめぐり、創立者ヴァリニャーノの構想と動機、それに対する反対を紹介して、日本国内の弾圧により府内コレジオの存続ができなくなってから聖パウロ神学校が大きな役割を果たし、極東のもっとも重要なコレジオとなったと位置づける。第三章は神学校の人員構成及びその組織とシステム、現地修道院との関係を紹介し、第四章は神学校の教育内容（ラテン語、倫理神学、哲学、神学）及び学生の生活の時間割を詳述する。第五章は神学校の資金、収入、支出を分析する。最後の付録は日本のコレジオで使用されていたゴメス『天球論』の中国訳である。聖パウロ神学校でも利用されたものだからだという。

本書は、主な史料として高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』の第二部「キリシタン時代マカオにおける日本イエズス会の教育機関」に依拠する。聖パウロ神学校に関する中国語による研究が少ないため、氏の紹介する多くの日本語文献は中国語圏の読者にとって非常に有益である。



『耶蘇会士与晩明海上貿易』
社会科学文献出版社、2017年

『耶蘇会士与晩明海上貿易（イエズス会士と明朝晩期の海上貿易）』
（社会科学文献出版社、二〇一七年）

氏の最新著書『耶蘇会士与晩明海上貿易』は八編の論文から成る。大半は前記『遠東耶蘇会史研究』から派生し、さらに研究が深まったものである。すなわち、1「ヴァリニャーノと中国――明朝晩期の中国教区の行政的所属」、2「宣教師の新しい服装――マテオ・リッチの衣替えとヴァリニャーノの文化適応政策」、3「〈殉教図〉考――宣教権保護の問題とイエズス会・フランシスコ会の確執」、4「キャピタン考――マカオ・日本の貿易とイエズス会の商業活動の問題若干」、5「イエズス会士と明朝晩期のマカオ・日本の生糸貿易の問題若干」、6「イエズス会士と明朝晩期のマカオ・日本の紡績品貿易の問題若干」、7「宣教師と黄金――明朝晩期のマカオ・日本貿易を背景として」、8「陸若漢（ジョアン・ロドリゲス）に関する研究」である。

本書における初出と思われる部分は、マテオ・リッチがイエズス会の修道服から中国の僧侶服と儒者服へ着替えたことを、現地の伝統と価値観に合わせた努力として取り上げた章である。また、ロドリゲスが日本で受けた教育、豊臣秀吉と徳川家康との関係を詳しく紹介したのも新しい試みのようである。ロドリゲスに関しては、主に Michael Cooper の *Rodrigues the Interpreter: an Early Jesuit in Japan and China* の和訳『通辞ロドリゲス――南蛮の冒険者と大航海時代の日本・中国』（松本たま訳）を参照しているが、この和訳は流麗ないっぽう、英文原著の注釈をすべて省略しているため、原著にある多くの情報が脱落しているのは非常に残念である。

戚氏の研究は豊富な史料に基づいたものであり、中国語圏におけるイエズス会研究が大きく進歩していることを示したといえる。東アジアのキリスト教に関する研究は、日本人研究者の成果を共有することが必須の条件となっていることが戚氏の著書より確認することができるとともに、中国語による研究成果のさらなる刊行に期待したい。